

日本大学国際関係学部国際交流学科主催  
2007年 ゼミ・フィールドワーク発表会  
(2007年12月4日 5限 於15号館1512教室)

小代ゼミ報告 要約

「植民地と戦争を経た交流のかたち～サイパンの場合～」

要約編集：尾島雄大 (3年)

はじめに

小代ゼミナールは、「21世紀日本の国際交流のかたち」を戦前と戦後の対アジアと対米経験をそれぞれ振り返ることで模索しつつ様々な活動に励んでいるゼミである。

今回のサイパン研修は、2007年9月11-15日に行われた。同島は日本にとって南国のレジャー地として有名であるが、スペイン、ドイツ、及び日本の植民地を経て、第二次世界大戦中は日米激戦地に、そして戦後はアメリカの信託統治領、現在はアメリカ自治領となった歴史を知る人は少ない。しかしそうした複雑な背景ゆえに20世紀の日本の国際交流の軌跡と課題を考える素材が凝縮されている場所でもある。今回の研修は、観光地サイパンに残る日本統治と日米戦争の痕跡をたどり、その今日的意義を探り、今後の日本とサイパンの交流のあり方を考察することを目的とした。

1. 日本統治時代の名残

サイパンの日本統治は、1920年から25年続いたが、その名残は思っていた以上に少ない。私たちが訪れたのは、日本家屋、神社、日本刑務所、旧日本軍基地及び要塞、マナムコ敬老センター、そして北マリアナ博物館（戦前日本病院だった建物を利用）等である。マナムコ敬老センターでは、日本統治時代と戦争を体験した方々にお話を聞き、島内に残る日本の記憶をたどった。

○ 日本家屋

島内には、戦前に日本からの移民によって建てられた日本風の木造家屋が2軒のみ残っている。うち1軒には、日本人を父に持つおばあさんが住んでいる。おばあさんは英語を話し、日本語はほぼ忘れていたが、覚えている日本の歌を口ずさんでくれたり、日本経営の製糖工場に勤めていたお父さんの思い出などを話してくれた。家屋の内部は見られなかったが、雨漏りなど相当老朽化しているようだ。歴史遺産として保存する動きはまだないのが残念だ。(写真1-A, 1-B)

### ○ 神社

神社は、日本人移民が“国家神道”の精神から建てたものだが、アメリカ化した現在のサイパンに残る鳥居は異様な光景に見えた。マウント・カーメル墓地内に残る、南興神社の白く塗り替えられた鳥居（写真2）、ジャングルの中にひっそりと立つ八幡神社、日本軍の勝利を祈って建てられた彩帆香取神社などは、現地の人にほぼ完全に忘れ去られている。しかし、近年ようやく保護の動きも出てきており、八幡神社の場合 私たちが訪れた日は、ちょうど北マリアナ連邦政府によって「歴史的遺産」として保存されることが決定したときであった。

### ○ 日本刑務所跡

町の中心地には、戦前日本統治者が使用していた刑務所が空襲で半壊した状態で雑草の生い茂るまま残っている。（写真3）主に現地人が収容され、中には酒を飲んだだけで牢屋に監禁された人もいたという。風化状態といえども、狭く暗い刑務所の雰囲気は伝わってきた。刑務所を囲む石壁には、その前に罪人を立たせ銃殺刑を執行した場があり、その壁には生々しい弾丸の後が残されていた。

### ○ マナムコ敬老センター

マナムコ敬老センターには、日本統治と戦争体験をした人が多くいる。学校で日本人に教わった歌を未だに覚えている人や、日本語で会話ができる人がいた。統治していた日本に悪感情を抱いている方は少なく、2005年6月日本の天皇皇后がこのセンターを訪問したことを誇りに思っている人も多かった。しかし、悲惨な戦争の傷跡は心に根強く残っており、ただ単に現地の人々が日本を悪く思っていないければ良いとすることはできない。

### ○ まとめ

事前勉強の段階では、サイパンには日本統治時代の建物や産業、経済発展の跡が数多く残っているだろうと予想していた。しかし実際は大戦中の米軍の空襲でそれらはほぼ壊滅していた。さらに戦後、アメリカは戦争の傷跡を隠すために、発育の早いマメ科植物の種を島一面にまいた。そのため、日本統治時代の面影も一緒に覆われて消滅してしまったのである。日本統治時代の記憶は、アメリカにとって必要なかったのだろうかと考えざるを得なかった。

## 2. 太平洋戦争の傷跡

私達は、旧日本軍弾薬庫跡、戦車、機関砲の残骸、旧日本海軍司令部跡、アメリカン・メモリアルパーク、野戦病院跡、日本軍最後の司令塔跡、バンザイ・クリフ、スーサイド・クリフ、などを見学し、5万人の日本人が犠牲となった軌跡をたどった。

### ○ 旧日本海軍司令部跡

海軍司令部跡は、ジャングルを進んで行き着く人工のトンネル状の洞窟内にあ

り、中を歩くには懐中電灯が必要だった。(写真4) ここで亡くなった大勢の人のため、中で線香と水を供えてお祈りをするようガイドさんに勧められた。奥の行きづまったところには、カタツムリの殻が貝塚のように堆積していた。米軍に追い詰められ洞窟内で食料が尽きた際、カタツムリを食べて飢えをしのいだという。戦争遂行の中核である司令部が、このような原始的な方法で生き延び、それでも米軍を相手に戦っていた事実を目の前につきつけられて、私達は言葉を失ってしまった。

#### ○ バンザイクリフ・スーサイドクリフ

バンザイ・クリフとスーサイド・クリフはサイパンの最北端の日本方面を向いた岬にある。(写真5) 米軍に北へと追い詰められ逃げ場を失った日本兵と民間人が、「天皇陛下万歳」と叫び海へ身を投じたことにより、バンザイ・クリフと呼ばれるようになった。スーサイド・クリフ(自殺の崖)も同様である。「捕虜になる不名誉より死を選んだから」と解されているようだが、実際は日本軍が民間人に自決を強制命令したという説明も聞いた。また当時の米軍も「死を好む狂信的日本人」といった偏見を持ち日本と戦っていたことも忘れてはならない。なお両方の崖の上には生々しい数多くの慰霊碑がある。(写真6)

#### ○ アメリカン・メモリアル・パーク

アメリカン・メモリアル・パークは、戦後アメリカが造った戦争博物館である。館内で上映されているドキュメンタリー映画では、日米戦における生々しい銃撃戦や、日本人女性が赤ん坊を抱いてバンザイ・クリフから飛び降る瞬間、そうした民間人の死体が無数に海面に浮いている場面などの映像が、戦争の悲惨さを伝えていた。

#### ○ まとめ

これらの傷跡は、サイパンの戦闘が如何に壮絶だったか知るのに十分な場所であり、そうした実情を伝えない日本の教育に疑問を感じた。しかしアメリカの戦争博物館も、“人道的なアメリカ兵”、“止むを得ず民間人をまきこんだ戦争”といった説明が目につき、アメリカの戦い方を英雄視するような意図に疑問を感じるゼミ生が少なくなかった。当時のアメリカ兵は、日本人種を下等動物とみなし、「ネズミ駆除」と言って日本人を殺していたという記録もあるが、こうした事実の側面を同博物館は伝えていない。戦争博物館というのは、戦争の悲惨さを伝え、二度と戦争を起こさないようにするため造られるもので、各国の情報戦の一つとして利用されるべきものではない。もちろんこれは日本の場合にもいえる。戦争を記念する博物館の意義を考えさせられた。(写真7、8)

### 3. サイパン文化

400年以上にわたりスペイン、ドイツ、日本、アメリカが支配してきた島であるが、チャモロ人といった現地人も独自の文化を持って存在する。現在のサイパンにおける文化はどのような特徴をもち、どのように発展していくのだろうか観察した。

#### ○ 日本文化の存在感

1. で説明した通り、日本統治の名残は、アメリカ風の町並みの中で存在感がない。日本人観光客が訪れるガラパンという繁華街には日本語の看板、日本料理店が氾濫していたが、そこを一步出ると、ラーメン屋、すし屋といった日本食文化は全くといっていいほど見かけなかった。日本語も、「マッサージ (マッサージのこと)」という看板以外には皆無だった。

#### ○ アメリカ文化の存在感

サイパンの町並みや食文化からは、既にアメリカ化しているという印象を受けた。たとえば、アメリカの代名詞であるマクドナルドやケンタッキー。日本の場合はサイズや量の面で日本風に調整されているが、サイパンでは、ジュース飲み放題、ケチャップかけ放題。しかも、マクドナルドでは、メニューにご飯がついてくる。(写真9) スーパーマーケットも、商品はどれもアメリカン・サイズで量も多い。日本に比べて野菜コーナーはとても狭く種類も限られていたが、精肉コーナーはかなりのスペースを占めていて、日本との食生活の違いを実感することができた。

#### ○ 地元、ミクロネシア文化の存在感

サイパンにあるのはアメリカ文化とは言い切れない。サイパンには、チャモロとカロリニアンといういわゆるサイパン人がいる。2000年に行われた人口調査によると、サイパンの人口のうちチャモロとカロリニアンの占める割合は25%しかなく、しかも、混血が進んだために純血のチャモロやカロリニアンは現在1人もいない。サイパンで最も多いのはフィリピン人で全人口の26%、それ以外には中国人22%、韓国人4%、日本人1%、白人系は2%弱となっている。労働人口だけ見ると80%が外国人で、サイパンの経済は外国なくては成り立たない状況にあるようだ。しかし、ガラパンで毎週木曜の夜開かれるストリート・マーケットでは、屋台の大半がチャモロ料理の店や現地の雑貨を扱った店である。(写真10) こうしたエスニック文化は、サイパンの正装であるアロハシャツやムームーを着て、頭に花飾りをつけている政治家、役人、一般人などにも表れている。行く先々では、「Hafa adai (こんにちは)」という現地語での挨拶を聞くことができ、それを勧めてもいるようだった。日本統治、アメリカ化、と変わってきた時代の波の中で、現地人が自分たちの文化を取り戻そうとしている努力がうかがえた。

#### ○ サイパンの大学での場合

私たちが訪れた北マリアナ・カレッジ (サイパンの公立短期大学) では、サイパン研究が理系・文系共に積極的に行われているようで、サイパン関係の資料も

豊富に所蔵している。学生ラウンジでは 学生がダーツやビリヤードで遊んでいて、キャンパス文化はアメリカのそれである。 また私たちが参加した「北マリアナの歴史」という講義からも自国研究の積極さが窺えた。しかしゼミ生が、サイパンに現在する日本建造物の扱い方について質問をした際、講義をしてくれた先生は、「今は保存しようという動きがみられる」と答えたものの、現地の学生はこの質問に興味を示したようには見えなかった。 サイパンは、アメリカ化を継続させていくのか、またはついに現地文化を復興させるのか、そして、日本文化はどのようにして再びこの地に戻ってくるのか、今後の動向が楽しみである。

(写真11)

### まとめ ～日本とサイパンの将来～

私たちは 観光地サイパンと日本の歴史的関わりを知り、多くの衝撃を受けた。平和ボケしている私たちがこれからどうするべきなのか。以下3点を考えた。

第一に、日本の植民地時代の記憶がほぼ形骸化しているという事実である。これは、日本文化に魅力がないということか。それとも、アメリカにとって日本が支配した過去は必要ないということだろうか。日本は、過去に自国が行ったことを忘れないためにも、植民地時代の歴史的遺産を保存することは必要なことだと思われる。しかし、日本が保存の動きをすることによって、“大日本帝国”としての記憶を残したいのかと各国から批判を受ける虞もあるだろう。また、日本語を学びたいと考えるサイパンの人の援助をどのように行うことができるかということも考える必要があるだろう。

第二に、こうしたサイパン特有の歴史を、各国にどのように伝えていくかの問題がある。サイパン観光局では、戦争の記憶を観光客に伝える際、彼らの出身国別に異なる体験を説明していると説明を受けた。例えば、日本人観光客には悲劇性を、アメリカ人観光客にはアメリカの栄光を、韓国人観光客には日本統治時代の悲惨さを強調するそうだ。しかし、国によって歴史の見方が異なっているままでは、いつになっても戦争の歴史が各国の交流の足かせになるばかりである。そのため、国境を超えた過去の共通体験を語り、悲惨な過去の歴史を、各国の今後の交流のために活かせるようにしていく必要があるのではないだろうか。

そして第三に、環境問題がある。私たちは、地元の環境保護団体 Beautify CNMI とともに、大戦中に米軍が上陸したビーチのごみ拾いに参加した。(写真12) これは戦死者の魂を鎮めると言う意味もあるそうだ。一見きれいなビーチには、かなりのごみがあった。サイパンの財政は観光が主であり、観光客を増やすことがサイパンの経済を発展させることに繋がる。そのため美しい自然を守り続けることは、サイパンの経済を助けることにもなる。このことはサイパンを訪れる日本人がしっかり自覚すべきことであろう。

サイパンの過去と深く関わった日本人は、その歴史を理解し、現地の人々とふれあい、島が誇る文化を学び、環アジア・太平洋地域における“知の交流”をより活発にしていく必要があることを深く学んだ意義深い研修であった。

## 資料



写真1-A： 日本家屋



写真1-B： 日本家屋を守るおばあさん



写真2： 白く塗り替えられた鳥居



写真 3 : 日本刑務所跡



写真 4 : 旧日本海軍司令部入口



写真 5 : バンザイ・クリフ



写真 6 : バンザイ・クリフの慰霊碑

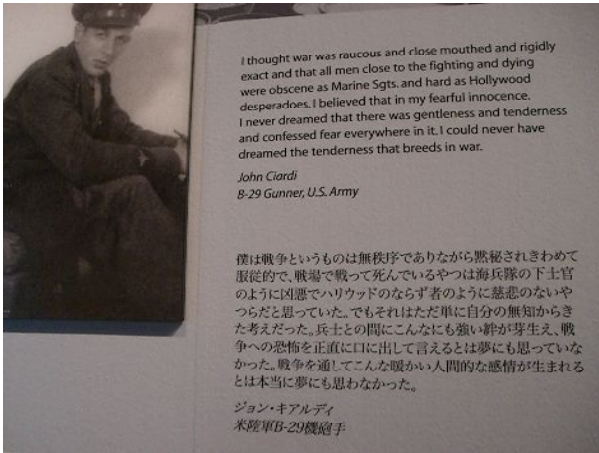


写真7： アメリカン・メモリアルパーク戦争記念博物館の展示



写真8： 同上



写真9：サイパン流マクドナルドのメニュー



写真10：エスニックフード





写真11：北マリアナ大学



写真12：現地ボランティア団体とのビーチ清掃